
GLUTTONS!

琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GLUTTONS!

【ΖΠード】

Ζ3497Y

【作者名】

琳

【あらすじ】

私、神崎りつは学校から帰る途中に、どうやら異世界に飛ばされてしまつたようです。元の世界には、もう戻れなくとも構わない。・
・・・・ん？もしかして、これは召喚ってやつですか！？勇者の件なら任せて下さい。おいしいご飯とふかふかなベッドを確保してもらえるなら喜んで……と思つたら、召喚の間じゃなく広大な草原に。ここどこだよ！？

容姿、成績共に平凡で、取り柄といったら脚の速さの私が、かつ

「ここにいるか抜けてる勇者とグルメ旅、もとい世界を救つ旅に
出でる。」

いたひごくべきみかん（繪畫毛）

初心者なので生温ご用で見てやつてください。『メモリ感をもくべせらるよつ頑張り、マス。

こたつといえぱみかん

それは何の変哲もない、寒い冬の間のとある一日になる予定、だつた。

一昨日や昨日と変わらない、今日と明日の違いは日付だけなんていふような、そんな普段通りの日。

「さみー・・・・・」

鼻をズズッと啜りながら、私はいつも深くポケットに両手を突っ込む。

ホッカイロを持つて学校に行くべきだったと後悔した。ちなみに私は断固貼らない派である。

「まあでも、もうちよいでの家着くし」

通りに誰もいないのをいいことに、独り言を続ける。

いつものようにだらだらと授業を受けて、数少ない友人の一人と昼ご飯を食べて、午後の授業が終われば即下校した。
もう、部活には入つてないので今は大手を振つてご帰宅の途中である。

(家帰つたらこたつでぬぐぬぐしよう)
うへへ、と緩んだ笑みを浮かべる。

と、冷たい風が吹きつけて私はウツと呻いた。

寒い。特に太股が辛い。辛すぎる。

女子高生のおみあしになんて仕打ちを！貴様、断じて許さん！
と、心の中で自然の脅威に立ち向かってみる。

ザアアッ。

私の心の声が聞えたのか、いつそう強く風が吹く。

「うひやあ

間抜けな声をあげて私は風を睨みつけようと・・・・・クソ、睨めない！

そんなバカなことをしている内にも、風は強く吹きつけてくる。道端に寄せられていた落ち葉が舞い上がり、木々が風でザワザワと鳴つた。

風力強すぎじゃね！？スカート押さえ、私はローファーの先をじっと見つめた。両手でスカートを押さえ、私はローファーの先をじっと見つめた。正確には、足のついている箒の地面を。

（沈んでる・・・・？）

見慣れた硬質のアスファルトが、ぐにゅりとひしゃげたような気がした、途端。

地面が消失した。

え。

なに、なんで。

どうして。

「ええええええうーんがーでいあむれびおーさああああああ
イヤアアアアアアー！ー！」

・・・・・とつさに本で読んだ呪文を唱えてみたけど、ダメでした。

じたつといへばみかん（後書き）

異世界ものを書くのは初めてなので、読んでいて気になる点などがあれば、知らせて頂けると助かります。

ハタチの妹おなせとのもと

耳元で唸っていた風の音が、ふつと遠ざかる。

同時に見慣れた景色が瞬く間に色褪せて、あたりは何も無くなつた。
ただただ、どこまでも乳白色の世界に私はいた。
くんくんと匂いを嗅いでみたが、何の匂いもしない。

「なに、これ」

乾いた声が咽喉から零れる。状況を把握しようと、私は必死に頭を
動かした。

その一、夢を見ている。

「一番あり得るな、うん」

その場合、いつから夢だったんだろうか。

学校に行つたのも夢？

それとももつと前・・・・だつたら、いいのこ。

「・・・・・考かぶりえても仕方ないか」

そう呟いて私は頭かぶりを振つた。

その一、・・・・。

どうせ、その一だらうけど
もしかしたら、ひょつとして。

「い、異世界に飛んじゃつてたりして」

ちょっとだけわくわくした声だったのは氣のせいだ、うん。

『おお・・・・！あなたがこの世界を救つてくださる勇者様な
のですね』

みたいなーすつごとに美少女に感謝されちゃつたりねー・美形騎士と魔
王を滅ぼす旅に出ちやつたりね！

「うへへ」

夢なのをいいことに、現状把握を放棄して思いつきり妄想してみる。勇者なので丁重に扱われ、美味しいご飯とふかふかなベッド、つまり高級な宿！

いくらネットに溢れている異世界モノだって、そんな都合の良い世界は無いだろうけど。

妄想の翼は自由に羽ばたくのだー（キリッ

おつと、よだれが・・・・・と口を拭きかけた時、突然身体が落下した。

「うあっ！？」

いきなり体重増えた！？いやいやそんなバカな・・・・・間食減らやう。

やみくもに手足をバタつかせてみたが、何も変わらない。落ちているという感覚はあるものの、辺りは相変わらず乳白色である。

何故か自分の手や制服はクリアに見えるけど。
温泉の素みたいだな！

・・・・・ どのがうづか。

—まだかな—

私は相変わらず落ち続けていた。

下速度は徐々に緩やかになり、今はたんぼの綿毛が地面に落ちるのより少し速いくらいのスピードである。安全運転、大事ですね。

私もバスが苦しい！

ここに来るまでに持っていた鞄の中に読みかけの小説が入っていたから、あれがあれば退屈しないんだけどなー。

「うん」

「あー、ああああー」

「やーん!」
「くなーんしの・・・・・・」

暇です。すペくたくる暇です。

ダメだ。

考えを紛らわそと、落下しながら準備運動が出来るかどうか試してみた。ダイエットになるね！

「いつか」 - もんじゅ

結論。しゃちほりは無理でした。

肩入れとか屈伸は出来たけどね！ カロリー消費DAZE

そんなこんなで？ 時間を潰していると、一筋の光が雲の切れ間から溢れてくるように私の足元から上ってきた。

どのくらい下から照らしているのか解らないが、ゆっくりとその筋は広がつてくる。

やがてその輝きが全身を包み、私は眩しさにまぶたを瞑った。

ト
異空間を抜けたら、別世界だった、なんてこともしかしたらあるかもしれない。

その際は勇者オプションで色々贅沢出来ますように！

そんな不埒な願いを抱きながら、私は光の奔流に呑み込まれたの
だつた。
。

だいしぜんといへばたき（前書き）

ついに他の登場人物がでます。

だいじゼンといへばたき

まぶた越しでも、静謐な光を感じる。

正視する事の出来ない白光がしばらくの間私を包み込んだ。

・・・・・どのくらい経つだらうか。

数秒とも数時間とも判別のつかない『時』は、わずかな変化によつて終わりを告げた。

網膜に伝わってくる光の種類が変わったのだ。

白妙から、懐かしい赤黄色へと。

それは陽射しだった。確かに感じる、太陽の存在。

私は喜び勇んで目を開き、・・・・・え、みどり？

何この全てみどりつ

・サツ。

「あぐふつー！」

腰から頭のてっぺんを貫く衝撃に、私は息を「ホッ」と吐いた。

簡単にいえば尻もちをついたのである。

「つ痛たた・・・・・」

若干涙目になりつつ、視線を前にさだめると。

・・・・・見渡す限りの大草原が広がっていた。思わず言葉を失う。

青々とした緑野を、ビュウッと心地よい風が吹き抜けていく。肩まで伸びた私の黒い髪も風で舞い上がった。

「うわあ・・・・・」

驚きで涙も引つ込んだ。何これパネエ。

しゃがみ込んでいるせいかもしれないが、辺りには家一軒見当たらぬ。どこまでも、生鮮な緑草が風になびいているのが見えるだけだ。

キヤパシティオーバーした私は、座り込んだまま口を半開きにして、ポカンと大自然を眺めていた。

徐々に、思考能力が回復してくる。

どゆこと。

どういづこと。

まさか本当に、異世界？

「　　おい」

不意に、背後から低い声が聞えたのはその時だった。
ビクッとして後ろを振り向く。

目に入ったのは人の脚だった。

いい脚してそうだなー。

ついつい癖で筋肉のつき方などを観察してしまつ。

茶色いだぼつとしたズボンを穿いているせいによくは解らないが、引き締まつた筋肉を持っているようだ。
そのまま視線を上へ持ち上げていく。

少し汚れた木綿っぽいシャ、ツつて・・・・・ん?

なんか。

剣みたいなものが腰に引っ掛けた、よつな。

ぎこちなく目を下へ戻す。

平和を掲げる國の民としては、アニメやマンガでしかお目にかかるないそれを、しっかりと我が目で確信し、私は大声をあげたい衝動にかられた。

えええええ！…なにこれ！いや剣だけど。剣だけどさあ！

「おい」

再び声をかけられ、反射的に上を向く。

すると射抜くような鋭さを持つた深緑の眸と、ぱっちり目が合つてしまつた。

「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・」

第一村人？発見です。

「じさんをたにせつて

原っぱのまんなかで、剣を持ったにちやんに出来ました。

黙つて睨み合つても仕方ないので、挨拶する。『ホン。

「じんにちは！」

「・・・・・ふもとの町の人間か？」

私の勇氣を振り絞つた挨拶がアア！お主・・・・なかなかやるな。

つて、そんな」とより、あの。

今更なんですけど。

「じい、どこですか？」

異世界だつたりしますか？

「・・・・・」

男の形の良い眉が訝しげに寄せられる。それから思つていたけど、イケメンだな！

私の茶色の混じつた黒髪とは全く違つ、鴉の濡羽色の髪。長毛は耳が隠れるくらいだ。

すらりと通つた鼻筋の下には、薄い唇が閉じられている。
ひとつひとつのバーツは首尾よく顔に収まつてゐる。が、眉をしかめているせいかやたら怖そつた見える。つか怖い。

「アルフェニア王国だ」

へー。あるふえにあ。どじいのウサギさん家族を彷彿させる名前だ。
いや、そんなに似てないか。

つていうか、やっぱここは異世界か。

そうかそうか。ほおおお。

「じいはレバノンという町の近くの草原で、」

「つざけんなあああ！！！」

「説明を続けようとしてくれた彼の言葉を遮ったのは、質問した張本^{わた}人だった。

「おいおいおいおい異世界トリップついでいたらセオリーは召喚の間だろそれがなんでこんな大草原に放り出されてんの私！？誰だ呼び出したのは下手くそな術使いやがって位置の特定が出来てないだろうが！！」

私の美女とおいしいご飯を返せええええ！

魂の叫びは、澄んだ風に運ばれていった。ノンブレスで言つたせいで、呼吸が多少乱れる。

息を整えたのち、ハツと我に返つて青年の方を見ると、無表情のまま固まっていた。あれ、さつきより距離が広がつてません？

「あ、すみませんちょっと取り乱しちゃつて」

あはは、と愛想笑いをしてみせる。

と、にーちゃんが少し近寄つて膝を折つた。さつきよりも顔が近くなる。おお、近くで見てもいい男。

彼は少し逡巡した様子を見せた後、私にゆっくりと話しかけた。

「ふもとに病院があるから、一緒に行こ！」

「私は大丈夫です！！」

なんてことだ、危ない人認定されていたとは。

力いっぱい否定する。

「心配するな、酷い事はしない

「だから大丈夫だってば！？」

お願ひだから気の毒そうな目で見ないで下さい。

誤解を受けるような真似をしてしまったのは私だけど、傷つく！

「あの、違うんです」

私は慌てて両手を振る。

「私、この世界の人間じゃないんです」

・・・・・うん、言葉の選択間違えた。

もう強引に病院まで引きずられるんじゃないか、と及び腰で彼に視線をやると、意外にも難しそうな顔で考え込んでいた。
しばしの間、草が揺れる音だけが空間を支配する。

「・・・・・俺はさつきまで、この草原にひとりで立っていた」
彼はおもむろに口を開いた。

「気配はなかった。だが、お前は突然俺の前に現れた」「まるで、うえから落ちてきたかのように」。

じつとダークグリーンの瞳に見据えられ、私は動けない。
緊張で喉がコクツと鳴った。

「さすが異世界人だな」

・・・・・

「えつ、信じるの？」

いや、疑われても困るけど。

だけどあんまりにもあつたり田の前の彼が納得したので、返つて心配になる。

「信じるも何も・・・・・別の世界から来たんだろう？」

若干首をかしげるに一ちゃん。

「う、はい」

「じゃあ、そうなんだろ」

面白い服を着ているな、と相変わらずの真顔で言つ男に、私は拍子抜けした。

普通信じないだろ。と思いつつも、この世界において異分子である私を認めてもらえた事に安心したのも事実だ。
帰りたいなんて気は起きない。
あの世界に戻りたくなんて、ない。

「信じてくれてありがとうございます。私は神崎りつといいます
草を掃つて立ち上ると、一礼して名を名乗る。

「…………ところで、私今何語しゃべっていますか？」

絶対日本語じゃない気がするよー」

彼の名は、ギイ・アルゴスといった。

ちなみに私達はこの世界の共通語である、ファルード語とやらを使つて会話しているらしい。わー私つてばバイリンクル！

一通り自己紹介をした。ギイはひとり旅をして世界を周っているらしい。何が目的なのかは言わなかつたので、私も訊かないでおく。

「ところで、リツはこれからどうするんだ？」

町まで送ろうか、と言つてくれたギイに私はにっこり笑つた。

「ええ、あなたと一緒に旅をしようと思います」

深緑の目が大きく見開かれる。

ここで会つたのも何かの縁。日本人は人とのつながりを大切にするのだ。

・・・・・まあ本音をぶっちゃければ、心細いので逃がしませんーヒューーーことです。

おねがいはじゅづらぢましょう

あなたと一緒に、旅をしようと思こます。

そう私が告げると、何故か彼は固まってしまった。

青い野原にビュウッと風が吹く。

「・・・・・お、俺と旅を？」

困った表情をしているギイ。

しかしijiは、押して押して押しまくるしかない！

「はい。・・・・・いきなりこの世界に来たばかりで、右も左もわからぬですしきりに信じてくれるとは限りません・・・・・。心細いんです、どうか一緒に連れて行って下さい！」

胸の前で両手を握り締め、目をつぶるさせ懇願する。

必殺、父にお小遣いを強請る。の応用版だ。

乙女のお願い（笑）に、表情を変えないギイ。・・・・・あ、よく見ると冷汗垂らしてる。

「しかし、俺は危険な場所に行つたり」

「足手まといなのはわかってます！でも、なるたけ迷惑かけないようこするので・・・・・ダメですか？」
わざと断りにくい空気を作り出す。

すると、ギイは深いため息をひとつ吐いた。

「男と二人きりで旅する事になるんだぞ。若い女性には辛いだろ？いいのか？」

真剣な色を帯びた鉄色の双眸が私の顔を覗き込む。

私はそのまま見つめ返し、きつぱりと言った。

「構いません。ギイさんからしたら私なんてガキでしょうから、間違いも起こらないに決まっていますし」

だつてこのにーちゃん、最低でも二十歳は超えていそりだ。
その答えを聞き、ギイが少し訝しげな顔になった。

「お前、俺をいくつだと思つてる?」

「え? 二十超えてますよね」

みるみるうちに彼の表情がドーンと暗くなる。
あれ?

「・・・・・・・ なだ」

「えつ?」

ボソッと彼が呟いた言葉を拾えず、訊き返すと。

「十七だ!」苛立ちの滲んだ返事が返ってきた。

「マジで! ?」

ひとつしか変わんないじやん!

驚愕すると、ますますギイの顔が暗くなる。

こ、これはまずい。早急にフォローが必要だ。

「あら、とっても凜々しい顔立ちだし、雰囲気も落ち着いてるから
勘違いしちゃいました!」

内心ダラダラ汗を搔きながら笑顔で褒めてみる。

「・・・・・ 別に、無理しなくていい」

どこか拗ねた口調でそっぽを向く、ギイ。

「歳も近くて心配だらうから、やはりふもとの町で、」

「お願いします!! せめてこの世界に慣れるまでは一緒にいさせて
えええ!!」

必死の形相で彼に近寄った。

ここで手放してなるものか。

それに、あんなにあっさりと事実を受け入れてくれた彼に興味がある。

このままお別れしてしまうのは、何となく惜しい気がするのだ。

「大丈夫です心配なんてこれっぽちもしてません！だから、ね！」

？」

ググ、と彼の目を見つめる。

「わ、わかったから。そんなに詰め寄るな」

若干逃げ腰になりながら、彼はようやく頷いてくれた。

「ありがとうございます！」

ターゲット確保成功です！

「では、改めてよろしくお願ひします、ギイさん」

適度な距離を置いた後、そう言って手を差し出す。

「ギイでいい。あと、敬語も止めてくれ」

ギイ曰く、共に旅をする相手に敬語を使われたら、気が休まらない

とのこと。

「わかりました、じゃなくてええっと、わかった」

正直丁寧な言葉遣いとか苦手なので、その申し出はとても有難い。もう一度言いなおす。

「これからよろしく、ギイ」

「ああ、よろしく頼む」

握ったギイの手は大きくがっしづとしていて、堅いまめが何個か出来ていた。

異世界に来て一日目。

私はこの親切な彼が一体何者なのかといひとにかく、全く気付いていなかった。

おねがこはじゅりやうせんじよ（後書き）

もつべしー話ー話が長こもつが良いかな?書いていて少し悩みます。

へりふへせれこじるのあまこす（前書き）

一応残酷描写付けました。

ベリーベルベットのアーチの前まで

ギイの旅に同行することが決定し、私は元気よく声を張り上げた。

「ではっ、出発！」

・・・・・どこ行くんだつけ？

チラツ、とギイを見る。

「レバノンに向かう。そこでお前の服も揃えられるだろ？」

あと、靴も。

彼の視線がローファーに寄越される。

確かに、この靴歩きにくいんだよなあ。

ちなみに彼の靴は、しっかりした造りの黒い革のブーツだった。登山に便利ですね！

ギイが地面に置いてあつたザックを拾い上げる。私は手ぶらだ。わーい！アッハハ、鞄どこ行つたんだろ。

「よし、行くか」

「うん！」

何はともあれ、出発です！

おおよそ6時間後。

私達は草原を抜け、森の中に入っていた。

ここを抜けた先にレバノンという町があるらしい。草原から歩いて

約半日程の距離とのこと。

ギイ曰く、「近い」。

しつと真顔で言つていた。何この人怖い。

「ころころ石が転がつてゐる道を、先頭のギイが迷わず歩いていく。

「・・・・・」

少しずつ呼吸が乱れてきた。ここ最近ろくに運動していなかつたツケが、体力とおなかの肉に回つてきている・・・・・ちいいつ。

一旦立ち止り、膝に両手をおいて呼吸を整えた。

「休憩するか」

少し離れた所からギイの声が聞え、私は頭を横に振る。

「大丈夫、すぐ追いつく」

その体勢のまま視線を前へ向けると、彼は暗くなつた空を見上げていた。

木々の隙間から見える上天は、夕暮れから紫黒の深い闇へと変わつてきている。

「あと少し距離を稼いだら、今日は終わりにしよう」
じきに道が闇に覆われてわからなくなる。そう言葉を続け、ギイが歩き出した。

私も姿勢をしゃんとして踏み出そうとする。

背中が、ゾクリとした。

反射的に身体が動き、私は横に飛んだ。

「リツ！」

ギイが駆け寄り、私の前に立つ。

彼の背中越しに、さつきまで私が立つてゐたところが見えた。
土が深く抉られている。

「グゥウル・・・・・」

唸り声が張り詰めた空間に響いた。狼によく似た獸が、毛を逆立て

て「こちらをねめつけている。

ギイがすらりと剣を抜き、刃が冷たく光つたのが見えた、途端。

ザンツ。

獸が倒れ込んでいた。

もうピクリとも動かない体から流れ出す血が、土に染みていく。暗がりの中でも赤い液体を見つめていると、私の中にも何かが染み込んだ。

それは、これまで本当に感じていなかつた現実感。どこか浮揚していた気持ちが、重みを持つてズドンと落ちてくる。

・・・・・ああ、こゝは。

本当に、私のいた世界じゃないんだ。

ふと家族の顔が思い浮かんで、シャボン玉のように淡く消えた。

「よく避けたな」

ギイの声で私はハッと我に返った。

「なんとなく、ね」ぎこちなく笑う。

「動くのが遅れて悪かった」

顔をしかめてギイが謝るのを、私は慌てて否定する。

「そんなことない！助けてくれてありがとう」

彼がいなければ、死んでいただろう。

すると難しい顔をしたまま、ギイが獸を覗き込んだ。

「・・・・・よし、食おう」

「食えんのー？」

ええええー！

ちょっとシリアスだった空気がぶち壊しです、いや、いいんだけど。

木の根元まで獸（カルといつらし）を引きずつていき、火を起こす。

そこら辺に散らばっていた乾燥した枝を放り込むと、炎が赤々と燃えあがつた。

「おお・・・・・・あつたかい」

ギイはカルの解体作業中だ。

カルは雑食で、気紛れに旅人や他の動物を襲つて食べることもあるが、基本的には木の実や草を食すので肉が柔らかいらしい。正直、大丈夫なのか？と思つていたので、ちょっと期待が高まる。ウへへへ。

ギイが切り分けた生肉を小枝に突き刺し、火で炙つていく。

しばらくすると、香ばしい香りが辺りを漂い始めた。

「食べ頃だな」そう言つとギイが肉にかぶりついた。

「いただきます」

私も匂いに惹かれてカルを口にした。

味付けをしていない分、口の中に肉の旨味うみそのものが広がつていく。

ちょうど良い焼き加減が、硬すぎない肉にピッタリだ。

「口に呑つか？」ギイが小首を傾げる。

「つまーい！すゞいうまい」

満面の笑みでそう返事をすると、ギイが満足そうに頷いた。どんどん食え、という彼の言葉に甘えて、次に手を伸ばす。

「火傷するなよ「アツツ！…！」

・・・・・くひのなかがいひやい。

「お前、バカだろ」

半日になつたギイに、私は何も言い返せなかつた。なぜって、肉で口の中がいっぱいだつたからね！べつべつに、本当の事だから言い返せなかつたとかじやなんだから！

ギイと2人で美味しいだけだが、流石にまるまる一頭は食べ切れなかつた。

そのままにしておくと獣が寄つてくるので地面を掘つて埋めておく。ごちそう様です。

たき火は交替で見張ることにした。トップバッターは私だ。

真つ暗な森の中で、炎のまわりだけが明るく照らされている。火の気が弱まりそうになつたので枝をくべていると、ふあ、と欠伸がでた。

たき火の向こう側で寝ているギイの後頭部を見つめる。

規則正しい呼吸が聞え、ひとりではないという事実を再確認してホツとする。

親切な人だなあ、としみじみ思つた。迷惑ばっかりかけているのに、嫌な顔一つせずにいてくれる。

「私、ヒモじやん」

まずくね？

何ていうか、人として！

自分にできること。役に立てる、なにか。

それを早く見つけたいと思った・・・・・・・切実に。

「ま、とりあえずは火の番だな」

んー、と伸びをして、ポイッと葉の付いた枝をくべる。パチパチと火がはぜ、真つ赤な火の粉が闇に踊つた。

2時間ほど経つた頃、ギイを起こす。そろそろ交代の時間だ。ギイ、と呼びかけると、本当に寝てたのかと疑うくらいスッと身を

起こした。

「交代の時になつたら起こしてね

そう言って彼の貸してくれた灰色のマントに包まって横になる。
慣れなきことづくめで疲れていたせいか、私はあつという間に眠り
に引き込まれていった。

へいらくせんじやこじゆのあはこす（後書き）

評価やお気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます。
！^_^やる気が湧きます。

さかなはやっぱやきたい

何かが聞える。澄んで美しい爽やかな声。

「・・・・・・」

ああ、鳥の鳴き声だ。ピィーと高い音で鳴いている。

「おい」

目覚めには最高の朝だね、って、うん？

「おいつ」

朝？ASAですか？

「起きろー！」

耳元で大きく叫ばれ、私はバツと身体を起こした。

「ようやく起きたか」

私の脇で、ギイがほっとした表情を浮かべている。

「・・・・・・おはよーいぞーこます？」

「おはよー！」

疑問形の私の挨拶に、普通に返してくる。

上を見上げれば、木々の間から洩れてくる朝陽。

全身に残っている、よく寝た後の満足感。

・・・・・・結論はひとつです。

「『めんなさい寝過』しましたああああーー！」

おそらく見張りの時間になつても起きなかつたのだろう。私のバカバカクソバカ野郎！

ジャパニーズ土下座を披露しようとすると、ギイが慌てて私を止めに入った。何か嫌なものを感じたらしい。

「いや、お前があまりにも気持ち良さそつて寝ていたから・・・・・・
・俺が起こさなかつた」

所在なさげに自分の黒髪を右手で搔き回しているギイに、私は詰め

寄つた。

「ギイさああんん！！」

ザザ、と座ったまま下がろうとする彼を気に留めず、私は主張する。

「それじゃほんっとうに私がただのお荷物になるじゃん！」

「に、にもつ？」 当惑した表情のギイ。

「そうだよ、ヒモだよヒモ！」

ヒモ・・・・と呆気にとられた彼に私はまくしたてた。

「私が出来ることなんて今は特に何も無いんだから、せめて私にも出来ることはやりたいの！だからどんなに気持ち良さそうに寝ても、これからは叩き起こして下さーい！」

そうだ。私にしかできない事なんて、この世界ではまだ何も無い。それは、向こうの世界でも同じだつたけど。

「ヒモは嫌だ・・・・」

だからこそ、出来ることはしたい。

俯いた私の上から声が降ってきた。

「 わかった。俺もお前を子供扱いしないよいつ気を付ける」

「

「じどもあつかいて。

私、ガキだと思われてたの！？

ええー、とギイさんを見上げると、いたつて真剣なお顔。ある意味、ヒモより切ねえ・・・・。

爽やかな朝の陽光が射し込む中、私は「オ、オネガイシマス・・・

・・・・」と彼に頭を垂れたのだった。

野宿した場所を離れてから2時間程経つ頃。

私達はようやく森を抜けたところに流れていた川で食事を取ることにした。

「長くてなるたけ真っ直ぐな枝を2本持つてきてくれ」とギイに言われ、森の入口でそれらしい枝を探す。

「お、これ良くな

見つけた枝を振り回しながらギイの所へ戻ると、彼はザックから取り出した細い繩をほぐして、更に細い紐へと変えた。

「はい、持ってきたよ」

「すまない」ギイは枝の先に細い紐を結び付ける。・・・・綺麗な指してますね、おにーさん。羨ましいなオイ。

完成したものを見て、私は声を上げた。

「釣り竿だ！」

どこから見ても、正真正銘の釣り道具である。

餌はどうするんだろ?と彼を見ると、荷物を「onsoonso」して干し肉を取り出した。

小さく引き裂いて、糸の先に付ける。
緩やかな流れの川にそれを投じると、あとは2人して獲物がかかるのをのんびり待つだけとなつた。

数分後。

ピクピクッ、と糸が引っ張られる感覚。

「キター！」

思いつきり引くと、水上に魚が跳ねあがつた。
そのまま地面へと落ちる。

「獲れたよー」ギイに自慢すると、ギイが不服そうに自分の釣り竿を眺めた。と、糸が水の中に引き込まれる。

ほどなく最初の一匹を釣り上げたギイは、ちょっとドヤ顔で私を見た。少しムカつとする。

くつ、私の本気見せちやる！

その後、私とギイは合わせて30匹ほどの魚を釣り上げた。

「うわー、3匹負けた」

悔しさを滲ませてギイを見ると、フフンと言われた。

「しかし、釣り過ぎたか」

こんもり山盛りになつた魚を見て呟く。

「大丈夫大丈夫ー」

さつきから腹ペコだつた私は、上機嫌でそう返した。

昨日より小さくたき火をつくり、魚を枝に刺して焼く。

食欲をそそる匂い辺りを漂い始め、私とギイは揃つて魚に手を出した。

また火傷をしないように、フーフーと冷ましてから魚にかぶりつく。

「おいひい

皮がパリッとしていて、塩無しでも素材のおいしさで充分イケるね！

しつぽの方が締まつててまたうまい。

食いきれるか？と言つていたギイもたくさん食べたので、魚はあつという間に無くなつてしまつた。

火の始末をしてから、ごろりと横になる。

昼時になつてきたので、ぽかぽかとして暖かい。

あふ、と欠伸をすると、「寝るなよ」とギイから釘を刺された。らじやーです！

でも、満腹だし陽射しに包まれてるし・・・・・・いかん、寝そうだ。

意識を保つために、少し離れたところに座つて川を眺めていたギイに話しかけた。

「ねーギイ

ギイがこちらを向く。

「この世界に魔法つて存在するの？」

そう、これはずつと気になつっていた事だった。

だって、王道じやないですか。

異世界といつたら魔法！

水の眷属とか、光の性質とか！

一 あるある「ああ、ある」

ガイはあいつと書いた。

「俺も多少は使えるが、やはり向き不向きがあるらしい」

「えつ、魔法使えるの！？見たい！」

超見たい。

しぶつていたギイだつたが、私がつるさくせがむと承知してくれた。

「リア
アルテ」

言葉と共に、ギイの右の手のひらに輝く球が浮かび上がる。

正義のための政治小説

卷之三

ノルマニ

目次

「かのじが」の語彙

ナムリがくとも利の知りている範囲では

「おまけに、さきの方の瑕は二ヶ所も言葉を呪うて済ませた

東方文化

興味がものすごく術は利はて、兎を起こして、り、へりかける

和洋魔術考文

便する。三回なり。かし
そして。なし。かし

卷之三

もろに面倒くさそうな表情でしたが、目の輝きをパワーアップさせた私を見ると、ため息をひとつ吐いて腰を上げた。

「ひ」が先、あじや

「お願いします師匠！」

どこまでも付いていきます！

私は飛び跳ねたいような気持ちで、ギイに敬礼のポーズをとった

の
だ
つ
た。

せかなはやひばやあたこ（後書き）

こつまでたつても町につかない orz

ふあんたじーこまくわしつせわの（前輪わ）

お氣に入り登録、評価あつがとづけれこまかー・へへ

ふあんたじーこまほひはつをわの

川のせせらぎが、だんだんと遠ざかっていく。

歩みを進めながら、ギイが口を開いた。

「魔法の使い方だが・・・・・・」

待つてました！

隣りに並んで歩きながら、次の言葉を待つ。

「まず、自分の中の魔力を見つける」

そこでギイはいつたん言葉を切り、ゆっくりと続けた。

「それには精神を集中させ、気を腹に溜めなくてはいけない」

ほつほづ。

なんか、武道みたいだな。

「すると体の中に温かなエネルギーの玉が現れる」

それが魔力だ、と彼は言った。

私は真剣に耳を傾け、聞き役に徹している。

「まあ、その魔力を見つけるのも一苦労なんだが・・・・・・」

「へー、そうなんだ」

「ああ。で、そのエネルギーを魔法として発動させるために、言葉が必要になる」

詠唱つてやつですね！

「その言葉だが、^{まいじと}真の意味を理解していなければ、ただ唱えても発動しない」

「ま、真の意味つて？」

私は(。 。 *)顔をしていたと思つ。ついに魔術発動の方法が！！

5歳の時から憧れてた、「魔女になる」という野望がアアー！

「…………説明できない」

「へ？」

間抜けな声を漏らす。

例えば、と彼は話し始めた。

「俺がさつき使つた「リア アルテ」って魔法があつただろ？あ
れは魔光球を生み出す言葉だ」

ランプよりも長持ちして、火傷することもない。

「だが、「リア アルテ」の真の意味を他人に説明する」とは誰に
も出来ない。自分で悟るしかないんだ」

悟る、ですと。

「ほんやりとしたイメージなら伝えることが出来るが、ピッタリの
説明が思いつかない」

そう言った彼に、私は動搖しながら頼む。

「ほ、ほんやりでいいから、おお教えてください！」

お願い師匠！

んー、とギイは顎に手をあてて考え込んだ。

「…………」いつ、ふわっとした感じで、ほわんとした

「ほんやりにもほどがあるわ！」

ついツツコんでしまった。

ムツと眉を寄せるギイ。

「仕方ないだろ、出来ないんだから」

かつてアルフェニア国」と歌われた魔導師が、真の意味を言語化し、
書物に記そうとした事があつたらしい。

彼は十月十日研究室に籠つた挙句、発狂したという。

「そのくらい難しいんだ」

フン、と鼻を鳴らすギイ。

「…………ちなみに、今の魔法についての説明とかつて

「俺に魔法を教えてくれた近所のじさん」の受け売り

きっぱりと答えられた。

この人、自分の言葉で説明するのド下手くそだ！

思わず心の中で失礼なことを考える。

「じゃあ、魔物とかも存在してるの？」

「ああ、下級魔族なら結構いるな」

上級になるとそうそう姿を見掛けないらしい。

触らぬ神に祟りなしだね！ まったくもって会いたくない。

「ちなみに、人間は魔族の魔法は使えない。発動条件が全く違うらしい」

その逆もまた然り。魔族に人間の魔法は使えないそうだ。

「へー」

今のも、おじいさんの受け売りなんだうな……。

そんなこんなで話を聞かせてもらい、日が暮れかける頃私達はレバノンへと到着したのだが。

「でっけー・・・・・」

予想以上に大きな町だった。

なんか関所っぽい場所を通り抜け、うろつると宿を探す。

夕暮れ時の町は、人々の活気でにぎわっていた。

声高に寄引きをしている八百屋、何やら魔法のアイテムらしきものをかごに詰め込んで配る少女。

人の行きかう通りをいくつも通り抜ける。

「ここにしよう

やがて、ギイが立ち止まつたのはさほど繁盛も寂れてもいなそうな宿だった。

「そういや、この町にどんくらい滞在するつもりなの？」
訊き忘れてたけど。

「2日の予定だ」

スタスターと宿の中に入つていく彼に遅れまいと私もくつついていく。

入ると、そこはこじんまりとした食堂のようだつた。

「2日間の寝場所をお願いしたいのだが」

カウンターの奥で忙しそうに働いているおばちゃんに声をかける。

「あいよ、一部屋かい？」

おばちゃんは手を休めるとそつと訊ねた。

「いや、一部屋だ」

「私は別に一部屋でもいいよ、金かかるし」

そつと口を挟むと、ギイが溜息を吐いた。

「お前、一応女なんだからもつと警戒した方がいいぞ」

「一応とはなんだ、一応とは。

口をくの字にするといつとつを聞いていたおばちゃんが豪快に笑いだした。

「面白い客が来たねえ。あたいの店は食堂も兼ねてるんだ、良かつたら飯も食つていきな」

ふくよかな体を揺らして話しかけてくる。

「ありがと」

笑顔で答える私の隣で、ギイがボソッと「…………一部屋は譲らないからな」と呟いた。

「あー美味しかった」

夕食を終え、私はグッドに飛び込んだ。

おばちゃんの「飯はとてもうまかった。素材のままも無論イケるが、やつぱし味付けされた料理を食べると生き返った気がする。

しばりベベジドの上で「んぐ」した後、シャワーを浴びて起き上がった。

シャワールームは下の階にあるので、借りたタオルと服を持って外に出る。

夕餉の時の食べっぷりがよかつたせいか、気前よくおばちゃんが貸してくれたのだ。

2階から階段を下りていく途中でギイに会つた。

黒髪がいつもより艶を帶びてゐる、どうやらシャワーを浴びてきたらしい。

「明日は市場に行って、色々と物を調達する

「ん、わかった。おやすみー」

「・・・・・おやすみ」

向かつたシャワー室は人気が無かつた。元々女性客が少ない上に、時間帯が遅いせいだろう。ちょっと熱めの湯で念入りに汚れを洗い流す。なんだかんだ言つても年頃の娘なので、汗や埃が気になつていたのだ。

「ふー」

頭をタオルで拭きながら階段を上がり、自分の部屋に向かつ。おばちゃんの貸してくれた服は、いい具合にゆつたりとしていた。再度ベッドに飛び込むと、仰向けになる。

「

『精神を集中させ、気を腹に溜める』、かあ

不意に昼間のギイの言葉が脳裏をよぎつた。

「いつちよやつてみますか

グッとまぶたを閉じ、深く息を吸う。

腹に手をあてて、深呼吸を繰り返した。

すーはーすー。

すーはーすー。

・・・・・ぱちっ。

さつきと変わらず木の天井が見える。

「だああああ、出来ない！！」

堪え性が無いって言わないでくれ！寝オチしそうになるんだって。
「大体、異世界から来た人間はすんごい魔力があるって設定じゃな
いのか」

ことごとく私の期待を裏切ってくれるな！

「ふん、もういいつ

体にシーツを巻き付けて、くの字になった。

えーい、いじけてやる。

ゆっくりと目をつむると、眠気がやってくる。

ん？なんか、腹のあたりがみょーにあつたかいよ？、な・・・・・・

。 。
何とも言えない違和感を感じたが、眠りに抗えず私は夢の中に引
き込まれていった。

ふあんたじーこまほひつせわの（後書き）

11月16日、少し加筆しました。

ショッピングはねんりに

次の日の朝、寝ぼけ眼をこすりながら下へ降りていくと、ギイは既に食堂に来ていた。

「おはよー・・・・・・

「おはよう」

灰色のシャツに黒いズボンの彼は、明瞭な声で返す。

「おはよう。よく眠れたかい？」

カウンターの向こうから話しかけてきたのは恰幅の良い宿のおかみさんだ。

「おはようございます。たっぷり寝れました」

ギイの向かいの席につき、おばちゃんの出してくれたお茶をする。

うーん、熱いお茶が目覚めによく効くぜ。

その後、トーストとベーコンエッグをたいらげ（もちろん、とてもおいしかった）私達は市場へ向かった。

私は昨日のうちに宿で洗濯した制服姿である。まだちょっとじめつてるけど、大丈夫だ、問題ない！

日が高い時間帯だからだろうか、昨日街へ入ったときよりも人通りは少なかつた。

それでも、市場に近づくと賑やかな人の声や音楽が聞えてくる。

「はぐれるなよ」

市場の入口で、ギイが私に話しかけた。

「らぢやーです」

結構な数の人が行き交っているので、心配い無用！とは言えないが。

つていうか、私ガキ扱いされてね？

確かに、右も左もよく解つてないような感じだけどさつ。

・・・・・左右も解らないんじゃ、心配されるよな、うん。

「どうした？」

自問自答していた私の様子を不審に思ったのか、ギイが顔を覗き込む。

「あ、ううん。何でもない」

さあ、いざ行かん！

上機嫌で歩き始めた私の背後から、「俺を置いていくな！」といつ声がかかつた。

「…………なあ」

「んんー」

「まだなのか？」

「うーむむ」

疲れ切った気配の彼の言葉を聞きながら、私は悩みまくっていた。あの綿のシャツはあんまし出来が良くないし、フランネルっぽいのは色が派手すぎる。

「…………あ、これだ！」

いいもんみつけた。

「へえ、お嬢ちゃんお皿が高いな」

疲れた様子のギイに、何故か憐れむような眼差しを注いでいた服屋のおっちゃんが私の方に向き直った。

私が手にしているのは、きれいな萌葱色をしたトレーナーのような服である。

「ありがと。これいくら？」

「150リグってことだ」

付け加えておくと、私達が泊まった宿は一泊350リグだ。ギイによると、ここいら辺では相場より少し安いとのこと。

高すぎる、と私が文句を言おうとするが、ギイが「もう少し安くならないか」と声を上げた。

「もうだな・・・・・。」一矢やさんの苦労に免じて、一矢は「00ログで

「ありがたい」

どうやら商談成立のようである。苦労ってなんだろ？

私も乙女の端くれなので、ちょおおつとばかり買い物選びに時間がかかったかもしないけど・・・・・・。
せいぜい1・2時間である。

「もう少し早く選んでくれ」という彼の絞り出すよつた声に素直に従い、私はなるだけ急いで2・3枚のシャツとズボン、そして保温に優れたローブと頑丈な靴を買った。

「・・・・・俺が？」

彼はきょとんとした。

うん、と頷くと「だが、お前の氣に入るか解らないし・・・・・・と困ったように返してくれる。

「いいの。ギイが選んだのが欲しいんだから」

きつぱりとそう言つと、ますます驚いた表情になつた。

「いいのか？」

「いいくてば」

「解つた」

そう言つて、かすかに唇を笑みの形にした男に思わず見惚れる。ちよつと微笑んだくらいですごい破壊力だな！

ギイにくつついで旅グッズを売つていてこひへ向かうと、彼は中に入つて品物を眺め、ためらわずに一つを選び出した。

「これにじよつ」

彼の手にはうりの付いた革で出来たザックが握られている。

「え」「つ」

何の動物だらう・・・・・思わず声がこぼれる。

「頑丈そだらう」誇らしげなギイには悪いが、アレを持って旅するなんて・・・・・私には出来ない！

「もーちょっとこう、違う感じのとかは？」

「じゃあ、これ」

選ばれたのは、ちつさい棘のいっぽい生えてくるザック。

「なんていうか、もう少しソフトな」

「これはどうだ？」

黒い光沢を放つ、なめらかな曲線を描くザック。

とある昆虫しか思い浮かびません。

「いやだあああ！」思わず涙目になる。

「俺が選んだのがいいって言つたじやないか！」

「言つたけど、それだけは無理」

「なつ・・・・・、この光沢の何が悪い！？」

私とギイの不毛な言い争いが、市場の一角に響き渡ったのだった。

しゃべたくはせんじゅうへ？（前書き）

かよひとシコアスな雰囲気を出しながら、頑張ってみましたが・・・。

じょくたぐせんじゅ?'

あの後、店のおつかやん「お密さん、静かにしてください……」と怒られた私達はおとなしくトームのよつた生地で出来たザックを買い、「すこすこ」と店を出た。

ちなみに買ったザックは、私がギイを上手く誘導して選ばせたものである。

ガスツー・ビザックの山に手を突っ込んだ彼の指先には、私のお皿当てのもの。

「あー、ギイそれ素敵!」

「え・・・・・・これか?」

「うんー…さつですが、センスあるうー…」「ううう」とばかりに褒める。

「そうか?」ちょっと照れ氣味のギイ。

「数あるザックの中からこれを見つけるなんて、只者じゃないつ」

褒めすぎても怪しいので、やり過ぎないよう『仄』を付けた。

結果、ギイは機嫌よく会計台に向かってこぐ。

案外単純な奴かもしれない。と思つた私だつた。

宿へ向かう帰り道の途中、私はギイに素直にお礼を言つた。

「何もかも買つてくれて、本当にありがとうございます」

今私は一文なしなので、服や靴の代金は全部ギイの財布から出でてもらつたのである。

「いや、気にするな」

素つ気ない口調のギイ。

「そういうや、どうやって稼いでるの？」

何となく傭兵かと思っていたのだが。

「村人に頼まれて、村を荒らす魔獣を退治したりしてこる」
へー。

「あとは盗賊から巻き上げたり」

・・・・・ん？

何だか物騒な言葉が聞えたような。

「そ、うなんだー。すごいね」

りつは スル をつかつた！

「国を出る時に貰つた金も残つてゐるしな」

少し声のトーンを低くして呟かれた言葉。

え？と訊き返そうとしたら、彼は誤魔化すように「着いたぞ」と言った。

会話するつむに宿まで來ていたらしい。

さつわと中に入つていく背筋の伸びた後ろ姿を、私は黙つて見つめた。

机に並べられた、ほかほかと湯氣を立ててゐる料理達。

「んー、おいしい！」

香草をふんだんに使つたステーキの肉汁が、じゅわっと口の中に広がつた。

「・・・・・お前つて皿そつて食つよな」

向かいの席に座つているギイが、少し呆れた調子で言つ。

「だつておいしいし」

じゃがいも（つぽい）と茄子（なす）（うしき）をマーテソースで絡めたの

を頬張りながら返事をする。

「ふーん」気の無い様子で返事をする彼の皿から、さつとソーセージをかつさらつた。

「なつ」ギイが声を上げた時には、既にソーセージは私の口の中。「ふひほひへるぼーははふひほほ!」

「何言つてゐかさつぱり解らん」

胸を張つてみせるとギイがハア、と軽く吐息をつき、次の瞬間彼のフォークがきらめいた。

「あつ！」

私の皿にあつたステーキがつ。

「ぐぬぬ・・・・・」

口元を拭つて、ギイがニヤリと笑う。 様になつてんのがますますムカつく！

「小癩な！」こつなつたら皿に物見せてやるー」

「さつきは不覚をとつたが、お前の手の内など丸見えだ」 キンッ、カカツ。

鋭くフォークを突き出しが、ことじことべギイのナイフに防がれる。ぬああああ！

「ちよいとあんた達」

不意に、重量のある声が落ちてきた。
ビクッとして声の聞こえた方を向くと、仁王立ちで立つてゐるおかみさん。

・・・・・・」「恐い。

手についていたフォークがポロリと落ちる。

「子供じゃないんだから食べ物で遊ばない！－」

「すみません！」

落とされた雷に、私とギイの言葉はきれいにハモつた。

「今日はよく怒られる口だったなー」

ボスッと音を立ててベッドに飛び乗ると、私は天井に向かって咳いた。

乾き切っていない黒髪が白衣シーツに広がる。

私はフツと身体の力を抜き、まぶたを閉じた。

魔力を探す練習である。

昨晩、眠りに落ちる寸前に何か感じた気がするようなしないような。深く息を吸い、ゆっくりと吐く。

『温かなエネルギーの玉』かあ・・・・・。

ふわふわしているものを、丸めるような感じだろうか。

取り留めのないことを考えながら、スウ、と息を吸った時だった。

ドクン

しゃうができない。

辺りの空気が消失したかのようだった。それと同時に、身体の下に感じていたベッドの気配が無くなる。

私は宙に放り出された。

「・・・・・」

微かに空気を吸えるようになつたが、声を上げようとしても喉が動かない。

目を見開いた筈なのに、景色は真っ暗でまぶたを閉じていた時と変

わらなかつた。

何が、起きた？

落ちつけ、落ちつけ私。

必死に冷静さを保とうとしながら、トリップした時のように手足をバタバタさせてみる。

黒々と塗り潰された闇は何も変わらない。酸素が薄いせいかすぐに息が切れた。

突然、漆黒の中に声が生まれた。

・・・・・虚無の空間で生きてしる
か
流石は時の軸を飛ひ

これが耳に届いた途端、意志と関係なく肌が粟立つた。
あわだ

何だかよく解らないけど、すつごくまずい気がするつうう！

さう

封じ込めの威力で、死なねばよいがな」

卷之三

生命のぴんち・・・・・・だと?つて私のバカそんなネタ振りまい
てる場合じゃないだろって、

1

身体の中心から何かが抜き取られていく様な感覚。吹き荒れるような喪失感が私を襲つた。

いやだ。

嫌だあああああああああ！！

必死に手を振り回し、脚を蹴りあげた。酸素が薄いなんて関係な

い、ただ必死に全身を使って抵抗する。

奪われたものの残滓を、身を捩つて守る。

制御出来ない感情の爆発が、周りを覆う**晦冥**かいめいを揺らしたような気がした。

「なに、を・・・・・！？」

驚愕した叫びが聞こえ、深闇の声が低く呻いた。

行つて。向こうに、行け！

声が出せない分、頭の中で怒鳴る。

やがて、指の先から痺れしていくのを感じ、私はぐつたりとして意識を失った。

しゃべたくはなつぬい。(後書き)

お気に入り登録ありがとうございます。お暇でしたら、感想など書いて頂けると嬉しいです^_^

存在を・・・・・やかす・・・・・。

「うあああああ！」

勢い余つて掛け布団をふつ飛ばしながら、私は跳ね起きた。視線をうろいろと彷徨わせながら、呼吸を整えようとする。窓から洩れてくる爽やかな朝の光や、白いシーツが、私を落ちつかせた。

微かに震える手で胸元を押さえ、私は安堵の溜息を零した。

「夢・・・・・・・？」

朝日に目を瞬しばたかせながら呟く。

なんかやたら厨二臭いせり、ふを・・・・・つて。

どんな、夢だつた？

起きた瞬間まで鮮やかに残つていたはずの記憶が、不鮮明になつている。

えーっと。

何か真つ暗で・・・・・。

うーむ。

「まあいいか」

そんな事より朝あさはなんだよね！

おばちゃんの「ご飯は最後までおいしかった。
宿の前で見送つてくれたおばちゃんにぶんぶんと手を振りつつ、私
達はレバノンを後にする。

「これからどこに向かうの？」

街道に出て早速、私はギイに尋ねた。

ちなみに今の私の格好は動きやすいグレーのズボンに、麻で出来た
長袖のシャツである。

この季節は朝晩が暖かいので、ローブは背中のザックの中。
「そうだな・・・・・・どこがいいか」

返ってきたのは予想外の言葉だった。

「えっ、決まってないわけ？」

驚く私。

「ああ。別に目的地があるわけじゃないからな
あつたりとギイが言ひ。

「じゃあ、もーちょっとレバノンに留てもよかつたんじや・・・・・
・」

おかみさんの手料理に腰袋をがっちり掴まれた私がそう呟くと。
「俺は世界をめぐらう者。ひとつの場所に長く居続けることは出来
ない」

ちよつぴり哀愁を演出させ、フツと笑うギイ。

お前はスナフーンか！とツツコみたいのを抑え、私は質問を重ねた。

「んじゃ、ここから近い街ってどんな所？」

「ちよつと待て」そう言つと彼はザックから地図を取り出した。

「セドとこう小さな村が西にあるな。あとは少し遠いが南のジオル

という街だ」

「へええー、なんでも、ここ数年で急成長してきた街なのだそう。

一七八一

美しい湖があるらしいと聞き、興味が湧く。

「ね、そこ行つてみよ」

地図を広げたままのギイにそう提案する。

「そうだな」ギイの賛同を得た私は、やつたー!と言いながら地図

を覗き込んだ。

意外と距離あるね！」
「ういや、都市みたいなのであるの？」

ああ。・・・・・ ウィルフレア王都だ

彼の長い指が、使いこまれた地図のある一点を指した。

そこには、かくかくと元氣の餘りが運算する。ほく元氣で、あくまで「おまじか」的な文言が詰る。

どちらも私が見た」ともなー、聞いた」ともなー文字である。

だが。

ねえ・・・・・これって何文字で書かれてる?」

「フルード文字だが？」

そべ、と和はひのく呟した

なべて語る所だ。

いや、読めたとは少し違う。知らない文字なのに、「解る」。ギイのダークグリーンの目が訝しさを湛えて黒髪越しに私を見ていた事に気付き、何でもないと首を振った。

「じゃ、行くつか！」

元気よく歩き出そうとした途端、シャツの襟を掴まれる。「ぐえ」と蛙の潰れたような声が出た。

「なにすんのさ」

「囲まれている」

抗議しかけた私の言葉を、冷静なギイの声が遮った。

えつ、と辺りを見回すと、街道の脇の森から何やら不穏な気配。

これが殺氣というヤツかアア！

元の場所でも似たような空氣を感じた事はあったが・・・・・比
べ物にならない。

慎重に息をひそめていると、やがて木の影からのぞいつぞいつ等
は現れた。

シャ、シャ という呼吸音が聞える。

「 ギイ」

硬い声音で彼を呼ぶと。

「なんだ」いたって平常心らしい返事が返ってきた。

「あれ、人ぢやないよね？」

ついでにいうと、動物でも無いですよね！

ぎらつく紫の牙。小熊くらいの体躯に、背中から生えた真っ黒な翼。

「ああ、魔獸だ」

アグテーモンの派生種だろうな、と言葉が続く。

あぐでーもん、とな。

私は「ぐう」と唾を飲み込んだ。

神崎りつ、異世界に来て初めての「魔獸とおー、エンカウントッ

」です。

・・・・・嬉しくなあああいい！！

たひせめまき（後書き）

お気に入り登録ありがとうございますー評価していただいた喜びで、
ニヤニヤします（え

なにいじらせやねん（前編）

戦闘シーンがグロいかな？と感じたのでR15付けました。あはん
つぶらな展開は今のところ無いです。

なにじともがやつてみる

突然異世界に飛ばされてしまった少女、りつ。

彼女は無愛想な青年、（顔よし）と共に世界を周る旅に出ることに決めたが、突然街道で魔獣達に囲まれてしまった。

可憐な女子高生、りつの運命やいかに！

「シャアア ツ！」

口から涎《よだれ》を垂らしながら、灰色の毛で覆われた魔獣が叫ぶ。

現実から逃避していた私は、その唸り声でハツと我に返った。
ああ、ナレーターに徹してみたい・・・・・。

「リツ」

遠い目をしながら、「可憐より美少女の方が良いか？」と考えていた私は、ギイの真剣な声に彼の方を向いた。

20匹ほどのアグティーモン達は、警戒しながらじりじりと私達を包围している最中だ。

何度も考へても、コマンドが『逃げる』『殺される』『逃げられない』しかない！

つていうか後2つはコマンドですらないつ。

「な、なに？」

ちょっぴり声が震えたのは氣のせいです、はい。

ギイがじつと私を見つめた。

薄い唇は真一文字に引かれ、一房の黒髪が頬に垂れかかっている。

こんな状況でもドキッとする程イケメン、だが。

今 私にはマイナスイオン（美形のみが作り出すことの出来る空氣、清浄粒子）より、凍てつくような敵意のブリザードしか感じられない！

バカな事を考えながら、やや緊張氣味にギイを見つめ返す。

あれが、「ここは俺に任せてお前は先に行け！」とか？

魔獸から逃げきれる自信・・・・・・・ないなー。

混乱氣味に思考していると、ギイがゆっくりと口を開いた。それと同時に左手が持ち上げられる。

「邪魔だからあつちに行つてろ
しつし、と振られる手。

!!

「あひ、傷ついたあー！」

うう、確かに役立たずだけじさ。

「あ、悪い。・・・・・けどお前戦えないし」

ぐさぐさと刺さる言葉の矢。

すっかりへこんだ私に、「突破口を作るから走れ」とギイは告げる
と、腰に差していた剣を抜いた。

太陽の光に白刃が光り、アグデーモンが一層殺氣立つ。

「
行くぞ」

ギイが身を屈め、伸び上がった途端。

あつという間に彼の直線上にいた一匹と間合いを詰め、体を横真つ
二つに斬り裂いた。

「リツ！」名を呼ばれ、弾けるよじにして走る。

雄叫びをあげて近づいてくる魔獸の腕を間一髪で避け、私は森の中に走り込んだ。

ドキドキしている心臓を落ちつかせるため、深く深呼吸をする。追いかけてくる気配は感じられない。

そつと木の影から、ギイと魔獸達の様子を窺つてみると。

背の高いギイに群がる4・5匹のじつい体躯。

刃が一閃し、魔獸達は悲鳴をあげて地面に倒れ込んだ。

返す刀で一匹の体を切断し、青い鮮血が地面に飛び散る。

「ヴァトラ（炎弾）」

ギイのよく通る低い声と同時に、指から放たれたいくつかの火の玉が、3匹の胸に命中した。

「シャアアツ」

次々に倒されていく仲間を見て声を荒げ、襲い掛かるアグデーモン。彼は剣を上段で構えると見事に両断した。

・・・・・ TUEEEE!!

テレビで見たフェンシングや、兄貴の試合で見た剣道の知識くらいしか無いが、彼がかなりの使い手だということは理解できた。

首を刎ね落とされ、動かなくなる魔獸。

殺さなければ殺される、それはかつて居た世界では存在しなかつたルールだった。

返り血一滴吐いていないギイの姿に、改めて自分のいた世界との違いと自身の無力さを思い知らされる。

ほどなくして全てのアグデーモンが解体され、地面に転がった。たつた一人で立つギイの手に握られた銀色の刀は、青い血で濡れて

いる。

刃を一振りすると、剣は抜く前と同じ轟りない輝きを放った。

「あっ、あの！」

私のおずおずとした言葉に振り向くギイ。

「助けて頂いてありがとうございました」

両手を胸の前で組み、瞳をキラキラさせる。

「…………何のつもりだ？」

ギイがやや引きつった表情で尋ねた。

「騎士に助けられた村娘の役」そう答えると、脱力して溜息を吐く。

「お前なあ、」

「うそ、本当に助かりました！ ありがと」

ポーズをやめて、素直にお礼を言う。

戦闘後のギイにどう接しようか迷った結果がこれである。いつそ何も考えない方がマシだった……。

恥ずかしさと氣まずさを紛らわせるように、「こんなに魔獣つてうじゅうじゅういるものなの？」とギイに質問すると。
「いや、アグデーモンのような低級魔獣はあまり群れで行動しないんだが……」
ギイの返事はどこか歯切れが悪い。

「まあ、考えても仕方ない。それより、お前脚速いな」「そーかな」首を傾げて曖昧に笑って見せる。

数か月前までは、自信を持つて肯定出来ただろうけど。

「ああ。ピンチに陥った鼠みたいにすばしっこかった」

悪気はない（多分）ギイの言葉に、うぐぐ、と戦闘能力ゼロの私は唸る。

「わつ、私だつて頑張れば…………」

「ごにょごにょ。

「そういや、魔力は見つかったか？」さらなるギイの追及に私は思

いつきり見栄を張った。

「もつちろん！」見つかってない。

「なら、俺がさつき唱えた呪文を試してたらどうだ？」

そこはかとなくギイの笑みが黒いのは気のせいだろうか？

「ふんっ、やってやるうじゃん」

私は目をつむると、大きく深呼吸をした。

腹の中でエネルギーの玉を大きくするイメージを描く。

おお、なんかほかほかしてきた。

結構いいんじゃない？と調子に乗るが・・・・・力を魔法に転換するやり方がいまいち解らない。

さつきギイが使ったのは、指先からピンポン玉くらいの大きさの火が弾丸みたいに飛び出る魔法だった。

鮮明なその光景を思い返す。

えーと、確か呪文は・・・・・。

「ヴァアトラ！」

目を開けて言葉を叫んだ瞬間。

ジユツと人差指から放たれた火弾が、ギイの真横を掠めた。

ちり、と艶のある黒髪が焦げる。

「・・・・・・」

固まっているギイ。

「・・・・・・」

わお。魔法発動しちつた。

「おつづけせりへんぢやへてらがこゑ（前書き）

更新遅くなつてすみません！

「おひでいはせつとむつよくひねじゅる

空気の中に、かすかに焦げた匂いが混じる。

髪を焦がされた当人のギイは、さっきから微動だにしていなかった。私は黙り込んだままの彼を前に、何を口にすべきか頭を巡らせる。

「な・・・・・何で私にこんな力が・・・・・!?'「・・・・・わざといしいな。

「ククツ、我が闇の眷属より受け継ぎし秘力に、恐れ入ったと見えるな」いやいや、これ倒されるフлагー完璧ダークサイド側の住人の発言だろ。

結局、口火を切ったのはギイだった。

「おおお前、魔法が!..」

ザザツと素早い身のこなしで詰め寄ってきたので、思わず逃げ腰になる。

「え、あつうんなんか使えた」

「軽いわ!..

すげーキレのいいツツ「ミ!」ありがとつ。そんなスキルも持つてたんだね!

「ついに来たよチート!ふはははははは」ってな感じで内心テンションあがりまくりなのだが、たいして驚いていない風を装う私。

「どうやって使った?」

「なんか、ギイが使つてたのを思い出して」

「あー。まあ、皆そうやって魔法の使い方を憶えていくんだが、それにしても一発で出来るヤツなんて初めて見た、と感心したよ。に言つギイに、私はドヤ顔をしないように表情筋を引き締めた。

「・・・・・何笑つてるんだ?」

「えつ」

「それからギイは私にいくつか魔法を見せてくれた。

「土龍抉ドルケ」

彼が地面上に手をかざすと、ぼいぼいと土が抉れていく。

「やつてみる」

「ついさ!」

深呼吸をし、今見た光景を鮮やかなまま思い浮かべる。

「土龍抉!」

ぼいぼい。

「・・・・・」

ほんのちょおおつぴし、地面が凹ヘんだ・・・・・氣ヒがする。

「次は水円盤ラテ フィールド。水性の攻撃魔法だ」

手のひらより少し大きい水の円盤が、すぐ近くに立っていた木の幹に突き刺さった。しばらくするとただの液体に戻つたが、木には抉られた傷がしつかり残っている。

よおし!今度こそつ。

「ラテ フィールド」

ひゅいいん！

バシャツ。

水円盤が上空に吹っ飛び、数秒後私の頭に水が降りかかった。

「…………つめたい」

思わずボソッと呟くと。

「つふ…………つ、次いくか」

ちょ、今ギイさん笑いませんでした！？

その後も訓練は続いた。

「姿失蔽。セラハイデ姿隠しの魔法だ」

なんだか忍者くさい魔法を教えてもらつたり。

「魅スタッカス惑、魔法をかけた相手を誘惑する」

「何に使うんだよ！」

訳の解らん魔法に、思わず突っ込んだり。

他にも治癒力を上げる詠唱や体力アップの魔法等、様々なものを教えてもらつた。

そして、片っぱしから魔法を唱えること約2時間後。

私は地面にへたり込んでいた。

ゼーは、と肩で荒く息をする。

「セансはかなりあるが・・・・・・魔力はそこそこだな」
すぱっとギイにそつ結論をだされ、「うべ」と呻く。

そうなのだ。

ギイが唱えたのを真似すればたいがいの魔法は発動したのだが、クオリティの低さがハンパなかつた。

姿失蔽では、首から上だけ見えなくなつたり。

光放は光の線が地面に激突した。

ついでにいうと、スタッカスは挑戦していない。

だつてなんかイヤじやん！

「おなかへつた・・・・」

「・・・・」チラツと始末したアグデーモンを横目で見るギイ。

「絶対食べないかんね？」

「意外とイケるかもしれない」好奇心の混じつた表情でこっちを向く。

「試すなアア！」

「うして、私の「チートk t k」（。）――」といつ夢は幕を閉じたのであつた・・・・。

へおつてこなせりとひづるへひられこゆる（後書き）

テストが迫ってきてるので、一旦更新が止まります。
再開は12月10日からになると思います。
どうぞ宜しくお願ひします。――・。三

たひせみわれ、よせなれ土（繪書き）

27日・・・・・・だと?おかしい、私のカレンダーではまだ10
田のはゞ(こ)う

・・・・・・すみません更新大幅に遅れました。よ

待つてくださいていた方がいらしたら、本当に申し訳ありません!

たひせみわづれ、よはなれ土

「未知を恐れてはいけない」と思つ

「恐れるよ！確実にバツデヒンデルードじゃん！」

つていうか、アグデーモン達の死体に誰も近寄つて来ないのが、何よりも証拠だと思つ。

「ゴブリンはなかなかイケるらしきや」

「マジでー？」

『魔獸は食えるか』といつ議題で私とギイが争つて居ると、おずおずとした声が耳に届いた。

「あの・・・・・」

声のした方を見ると、街道から逸れた脇道から、ひとりの少女が出てくるところだった。

15、6の可愛らしき子で、ウーハーブのかかつた橙色の髪の毛を耳のあたりで揃えている。ぱっちりとした琥珀色の瞳は、不安そうに揺れていた。

「おお・・・・・・なかなかの上手ですぜ」

つい、某漫遊記ドラマの悪役のようなセリフを吐いてしまった。

少女はそれに構わず、再び口を開いた。

「北の方角はどうじょうか？」

「え？えーっと、あつち

ぴつと指で指し示す。

「ありがとうござります」彼女は礼を言つて立ち去つた。

「どこまで行くつもりだ？」

ギイが訝しげに口を開く。少女は着の身着のままで、荷物を持つていなかつた。

「どこか遠いところ・・・・ジオルから、なるだけ離れた場所へ」

振り向かないまま、彼女はそう返事をする。

「北へ向かつて休まず歩いても、一番近い村まで3日はかかる」

彼女はビクッと反応すると足を止め、黙つて頃垂れた。

その疲れ切つたような背中に、私は問いかける。

「私達、ジオルへ行く途中なんだけど、何かあつたの？」

「！行つてはいけません！」

彼女はこちらを向くと鋭い声で言つた。琥珀の双眸が、今度は怖れを含んでいた。

「何があつたのか、教えてくれないか」

ギイが柔らかな声音でもう一度そう訊ねると、僅かな沈黙の後、少女はゆつくりと語り始めた。

ジオルの町では5年前に領主が急死し、代わつて新しい領主が着任した。

その領主の政策で、畠ばかりだつた街並みは、工場や煙突のある景色に変化していつた。

工場で働く人數が足りないため、外から流れ込んできた労働者その他に、商売のチャンスを嗅ぎつけた商人達も現れた。

彼らは豪奢な宝石や時計、珍品を売る他にいかがわしい風俗店も営んでいるとの噂だといふ。

少女はとつとつと言葉を漏らす。

「そのうひのひとつの店のある男が、私に絡んでくるよ！」なつて・・・・・

彼女は亡くなつた両親の後を継いで、ひとりで小さな薬草屋を切り盛りしていた。

その店はいわゆる裏通りとは離れたところにあつたのだが、ある時から黒いオーラを漂わせた屈強そうな男達が、店の前に居座り始めたのだという。

注意しても聞く耳を持たず、ガラの悪い男達を前に客足は減つていく。

困り果てていたところに、宝石店の商人が尋ねてきた。

「男は、店の前にたむろう男達をどうにかしてやると言つました」
だが。

『あなたが私の妻になるのが条件だ』
男がそう言つて笑つた瞬間、彼女はすべてを理解した。

「あの男が店の邪魔をしていたんですね。それが嫌なら自分と結婚しろ、と」

少女は唇を噛んで、両手を握り締める。

リアル悪代官な展開に、私は彼女にそつと尋ねた。

「ちなみに、その商人の外見って」

「禿げかけて脂ぎつたおっさんです」

「うあ（。台。）」

彼女は言葉を続けた。

「耐え切れなくなり、私は急いで街から逃げ出しました。でも男の仲間が放つた魔獣の群れに追われて・・・・・

「その男は、あんたを殺す気だったのか？」
ギイが驚いた様子で反応する。

確かに、一度妻にしようとした女性に魔獸をしかけるなんて、ゆかりなおっさんである。

すると彼女は微笑みながら言った。

「それは多分、私が彼をイスで氣絶するまで殴つたからだと思います」

笑みが黒い！

「そ、そうか」ギイがぎこちなく視線を逸らす。

「はい、迷いなく振り下ろしたので結構出血してたんですけど、まあ正当防衛ですよね」

しつかり殺意を込めてたんですけど、足りなかつたみたいですね。とボソッとつけ足された言葉に、私とギイは固まつた。

「…………とにかくこのままじゃ危険だよねー。」

いつまた魔獸が彼女を狙うかもわからないのだ。

「ええ、とりあえずマズイと思つて街を飛び出したのですが、これから先どうすればいいのか」

うーん。

悪代官なおっさんを、一体どうすれば。

と、私の頭に名案がひらめいた。

「くつ・・・・・・仕方がない、黄門様役はギイに譲るわ・・・・・・

・・・

「なんの話だ」

お銀さんは譲らないんだからつ。でもお風呂シーンはないよー。彼を無視して、私は彼女に優しく笑いかけた。

「私達と一緒に、ジオルへ行こつ?」

「ですが・・・・・・戸惑う彼女の手をギュッと握りしめる。

「大丈夫。面倒くさいことは、全部まとめてこのギイが成敗してくれるわ！」

「お前じやないのかよ！」

ギイのすばやいツッコミが、人気のない街道に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3497y/>

GLUTTONS!

2011年12月27日23時46分発行